

### モデルプログラム H-3 子どもの日本語教育の理論と方法—言語活動のデザイナー—

ねらい	対象の児童生徒が、どのような場面でどのような日本語の力が必要かに応じて、日本語を運用する活動を考え、授業をデザインすることができ、指導・支援に生かせるようになる。
対象	<input type="checkbox"/> 教師を目指す学生（教員養成課程他） <input checked="" type="checkbox"/> 日本語教育学を学ぶ学生 <input checked="" type="checkbox"/> 現職日本語指導担当教員 <input type="checkbox"/> 現職一般教員 <input type="checkbox"/> 管理職 <input type="checkbox"/> 指導主事 <input checked="" type="checkbox"/> 日本語支援員／母語支援員
外国人児童生徒等教育・日本語指導の経験	<input checked="" type="checkbox"/> 経験なし <input checked="" type="checkbox"/> 1年目 <input type="checkbox"/> 2-4年 <input type="checkbox"/> 5-9年 <input type="checkbox"/> 10年以上
高めたい資質・能力	<input type="checkbox"/> 捉える力（子どもの実態把握） <input type="checkbox"/> 捉える力（社会的背景の理解） <input checked="" type="checkbox"/> 育む力（日本語・教科の力の育成） <input type="checkbox"/> 育む力（異文化間能力の涵養） <input type="checkbox"/> つなぐ力（学校作り） <input type="checkbox"/> つなぐ力（地域作り） <input type="checkbox"/> 変える／変わる力（多文化共生社会の実現） <input type="checkbox"/> 変える／変わる力（教師としての成長）
主な内容	H 子どもの日本語教育の理論と方法
時間	60分
活動形態	<input checked="" type="checkbox"/> 講義型 <input type="checkbox"/> 活動型 <input type="checkbox"/> フィールド型 <input type="checkbox"/> 実習
流れ（・項目）	活動（◇活動の工夫）
1. 日本語を使う場面や目的の重要性を確認する。(10分) ・日本語指導の内容(H) ・目標設定と指導内容の決定(I)	1. 子どもが生活や学習のどのような場面で、どのような日本語を使って、何ができることが必要かを確認する。 ・忘れ物をしたとき、利用できそうな文型は「～は～をわすれました」 実際に忘れたら「先生、すみません、～をわすれました。貸してください。」 ・理科の観察で利用できそうな文型は「～は～くなりました」 実際の観察記録では 教師「2週間前と比べて、トマトはどう変わった？」 子ども「大きくなった！赤くなった！」
2. 事例から日本語を運用する言語活動の例を学ぶ。(20分) ・意味を重視した活動(ロールプレイ・タスク活動)(H)	2. 子どもの日本語教育の事例から、日本語を運用するための活動について学ぶ。 ※言語活動の事例は、受講者のニーズに合わせて適宜用意する。 活動例1 忘れた物を借りる活動(ロールプレイ：やりとりをして行動する) 持ってくるべき物のリスト(絵)と鞆の中に入っている物のリスト(絵)を見て 子ども：先生、〇〇をわすれました。かしてください。 先生：はい、どうぞ。 子ども：ありがとうございます(受け取る)。 活動例2 トマトの観察記録を書く活動(タスク活動：観察したことを報告する) ①やりとり 2種類のトマトの写真、あるいは絵(5月・6月)を見ながら 先生：トマトはどうなりましたか？(5月と6月の写真を見比べさせ) 子ども：大きくなりました。赤くなりました。 ②観察記録を書く 〇月〇日 トマトのかんさつ トマトは大きくなりました。そして、赤くなりました。 活動例3 出身国・地域の遊びを紹介する(タスク活動：知らない人に紹介する) 目標とする言語項目：～たとき、うれしかったです。 ①出身国・地域の遊びをビデオにとり、その紹介文を書く。 〇〇で、私はよく、〇〇をしました。ビデオを見てください。 (うまくできた)とき、とてもうれしかったです。 ②クラスメイトに、ビデオを見せながら、口頭で紹介する(紹介文を見ながら)
	◇その場面の実際の会話を考えさせ、日本語の指導では実際場面を想定しつつも、児童生徒の日本語の力等に合わせ、指導する表現を決定する必要があることを伝える。

<p>3. 学習活動をデザインする際の留意点を知る。(15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語教育の考え方と方法H</li> <li>・子どもの言語発達(F)</li> </ul> <p>4. 今後の指導に取り入れたいことを考える。(15分)</p>	<p>3. 子どもための言語活動を考える際に留意すべき点を知り、活動や授業のデザインにどう生かせるか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①4 技能の違いに留意して活動を展開する(話す・聞く活動→読み・書きの活動)</li> <li>②双方向から一方向の情報伝達へと活動を展開する。 やりとりによる内容理解や気づきの促し → 確認のために文章を読む、説明を聞く。作文を書く、口頭で発表する。</li> <li>③具体的に場面や状況を設定して、表現の使い分けを学べるようにする 例 先生への報告(丁寧体で) ⇄ 友達との会話(普通体で)</li> <li>④具体物や体験による活動から、言語を中心にした活動へと展開する 等</li> </ul> <p>4. 今後の日本語指導にどう取り入れるか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 取り入れたい活動、意識したい留意点をシートに書く。</li> <li>2) 隣の人と紹介し合う。</li> </ul>
<p>備考</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・90分で授業を組み立てるのであれば、2の言語活動の例を実際に体験して学ぶようにする。</li> <li>・この後、実際に言語活動を考えるワークショップを行い、ワークショップで計画した活動を実際に授業で行い、研修会で報告して学び合えれば、知識のみならず、実践力も高まると考えられる。</li> </ul>